

中世イエメンにおける奴隷

馬場 多聞

I. はじめに

奴隷廃止という思想を経験する 19 世紀以前において、奴隷制は普遍的な社会制度として世界の各地に存在していた [鈴木英明 2019]。一般に奴隷は、他者によってその肉体を所有されるなどして、財産を有する権利や婚姻する権利などを制限された人々と理解されよう。しかし実際には、奴隷に相当するような語で呼ばれた人々の実態は多様であり、彼らを一括して奴隷とみなすことも、それらの社会制度を奴隷制と総称することも難しい。それにも関わらず、大西洋奴隷貿易とアメリカ大陸で展開した奴隷制を前提として欧米ではじまった奴隷廃止の思想は、仕組みを異とするイスラーム世界にも影響を与えた。

1814 年にオスマン帝国 (AH 698–1341/AD 1299–1922, 以下半角スラッシュの左はヒジュラ暦、右は西暦を表す) とイギリスの間で黒人奴隷の売買を禁止する協定が締結されたことを皮切りに、イスラーム世界の奴隷制は徐々に下火となっていった [佐藤 1991: 182–186]。イスラーム世界における奴隷制のひとつの特徴は [清水 2015]、前イスラーム期より西アジアの一帯で存在した奴隷制をイスラーム法のなかで合法化するとともに人間としての一定の権利を奴隷に認めたこと、奴隷の解放をイスラーム的な善行と位置付けることで促進したこと、に求められる。結果として、奴隷と自由人の間には法的に明確な区別がある一方で、連続性が存在することになった。自由人のなかには解放された奴隷の子孫が多くいたし、奴隷やその子孫が為政者や有力者として社会に大きな影響力を有する例もまま見られた。また、自由人であるイスラーム教徒を新たに奴隷とすることは禁じられたため、スラヴ系やチェルケス系、トルコ系、エチオピア系など、主としてイスラーム世界外に住む異教徒が戦争捕虜としてあるいは商品としてイスラーム世界内部へ連れてこられ、奴隷として活用されていた。このことは、翻せば、イスラーム世界の奴隷制が他者を内部に取り込むものであると同時に、自由人の源泉をつくりあげる機能を有していたと見ることもできよう。

奴隷が社会で果たした役割が大きくなり得るという特質上、イスラーム世界における奴隷については様々な研究が成されている。特に奴隷を軍人として用いる軍事奴隷制についての研究の蓄積は大きく、アッバース朝 (132–656/750–1258) 下のグラーム軍団やマムルーク

朝（648–792/1250–1517）の 맘루크体制、オスマン帝国のカプ・クル軍団などがこれまで詳細に検討されてきた〔佐藤 1986; 清水 2005; 鈴木董 1993; 鈴木董 1997〕。また宮廷で働く奴隷のうちには政治的に強い影響力を有するに至る者もあり、特に女性や子供のための私的な空間で働く去勢者がアッバース朝やファーティマ朝（297–567/909–1171）、アイユーブ朝（564–648/1169–1250）、맘루ク朝の宮廷で果たした役割が分析されている〔Ayalon 1995; Chamberlain 1998; Cortese & Calderini 2006; Humphreys 1997; Marmon 1995〕。

一方で、エジプトやシリア、トルコ、イランといった中世イスラーム世界の中心地域を離れたイエメンにおいても、様々な奴隷と思しき人々が活躍していた。しかし史料の制約と研究者の関心の限界上、その実態の分析はこれまで十分になされておらず、管見の限りではイエメンの奴隷の歴史を概観した小論〔al-'Amrī 1987〕とラスール朝（626–858/1228–1454）下の家内



地図1 インド洋西海域

（出典）〔馬場 2017a: 6–7〕

集団を扱った論考〔馬場 2017b〕を除けば、専論は未だ著されていない。19 世紀以前の世界における奴隷の多様性に鑑みれば、イエメンにおいても何らかの特殊性あるいは他地域との共通性が観察されようが、不明な部分が大きい。

そこで本章では、中世イエメン、特にラスール朝が栄えた時代において、奴隸と思しき単語



地図2 イエメン

(出典) [馬場2017a: 14] に修正を施した。

で呼ばれていた人々の実態を、その移動性や人間集団としての展開に着目して議論を進めたい。アラビア語で書かれたラスール朝史料においては、奴隷あるいは解放奴隷と見られる人々を表す単語として、アブド ('abd) やジャーリヤ (jāriya)、グラーム (ghulām)、マムルーク (mamlūk)、ハーディム (khādim)、タワーシー (ṭawāshī) が見られる [cf. 佐藤 1991; 波戸 2008]。本章は、既存研究の成果にもとづきつつ、これらの単語の意味したところを検討するとともに、中世イエメンにおける奴隷を現代へつなげる文脈のなかでとらえなおすものである。

II. イエメンへ流入する人々

1. アイユブ朝の到来以前

イエメンと呼ばれた一帯の歴史は古く、遅くとも紀元前 8 世紀にはサバア (BC 8 世紀頃—AD 3 世紀頃) をはじめとしたサイハド文明諸王国が成立していた [蓐 2018]。このうちカタバーン (BC 8 世紀頃—AD 1 世紀頃) の支配下から分離・独立した部族連合であるヒムヤル (BC 2 世紀頃—AD 6 世紀) が、紀元前一千年紀の後半から南部山岳地域のザファール (Zafār) を首都として栄える。西暦 2 世紀末頃になると、エチオピアに拠点を置いたアクスム (BC 1 世紀頃—AD 10 世紀頃) がエチオピア系の人々を連れて南アラビアへの侵入を繰り返し、3 世紀以降にはヒムヤルを断続的にせよ支配下に置くこととなった。その結果、紅海沿岸部へのエチオピア系の人々の入植が加速したと見られる。

イスラームがメッカ (Makka) に興ると、イエメンはその最初期にこれを受容する。その後、正統カリフ (11–40/632–661) やウマイヤ朝 (41–132/661–750)、アッバース朝の支配を受けていくことになった。203/818 年にはアッバース朝の地方総督であったイブン・ズィヤード (Muḥammad b. Ziyād, r. 203–245/818–859) が独立して紅海沿岸部のティハーマ (Tihāma) にズィヤード朝 (203–409/818–1018) を興し、都市ザビード (Zabīd) を建設した [Kay 1892(1968); al-'Amrī 1987: 142]。ズィヤード朝はエチオピア系の奴隷を輸入し、軍事や農業に用いるとともに、ヌビア系・エチオピア系の人々に宰相の職を委ねた。最終的にはエチオピア系の宰相ナジャーフ (al-Mu'ayyad Nāṣir al-Dīn Najāḥ, r. 412–452/1022–1060) によって権力を奪われ、ナジャーフ朝 (AH 412–553 [1022–1158]) が成立した。

ザビードを拠点としたナジャーフ朝は、北部山岳地域に成立していたスライフ朝 (439–532/1047–1138) と対立した [Kay 1892(1968)]。ナジャーフ朝がエチオピアより軍事奴隷を購入していたのに対して、スライフ朝はアルメニア人と黒人 (aswad) から成る軍団を活用していた ['Umāra: 43–44, 71; 馬場 2017b: 245 n.56]。管見の限りでは、アルメニア人という北方に由来すると見られる軍事集団がまとまったかたちでイエメンで活動していた形跡が見られるのは、スライフ朝期の 515/1121–1122 年の記事が初出である。

またスライフ朝がザビードへ来襲した時の記事には、以下のようにある。

彼は自軍に向けて以下のように語った。「知らせよ。この荒野のアラブは、黒人のジャーリヤと子供を作りたがっている。そのため、アブドも自由人も黒い肌を持っている

のだ。‘aẓam を ‘azam とエチオピア風に発音している者がいれば、彼はエチオピア系であるので、殺害せよ。‘aẓam とアラブ風に発音する者であれば、彼はアラブ人であるので、そのままにしておけ。』[‘Umāra: 26]

後述するように、アブドは男性奴隷を、ジャーリヤは女性奴隷を、それぞれ意味した。この記事は、黒い肌を持っていたとしてもアラビア語を正しく発音する人々を土着したアラブ人——ここではアラブ遊牧民だけではなくアラビア語話者全般を指すと見られる——とみなし、エチオピア風にアラビア語を発音する者を最近になって新たにイエメンに至った者、すなわちナジャーフ朝軍とみなし、殲滅するよう呼びかけるものである。ここからは、西暦 12 世紀のティハーマにおいて、イエメンに住んでいたアラブ人とアフリカからやってきた黒人の混淆が進展していたことがわかる。

以上見たように、アクスムの侵入以降、ズィヤード朝、ナジャーフ朝の支配を通して、黒人、特にエチオピア系の人々が紅海沿岸部へ流入し続けた。彼らは、紅海へ通ずるティハーマに集住し、土着のイエメン人との混血を通してイエメン社会へ溶け込んでいったり、同化することなく人間集団を形成したりしていた（後述）。現代イエメンにおいても見られる黒人系の人々の起源の一端はこうした歴史的経緯に求められ、東アフリカを出奔した人々を取り込む磁場がイエメンに存在し続けたと見ることもできるだろう。

2. アイユーブ朝の到来以降

史料の記述に限りがある以上、量的な検討こそできないものの、アイユーブ朝の到来以降クルド系・トルコ系の人間集団のイエメンへの流入が加速したものと考えてよいだろう。アイユーブ朝のサラーフッディーン (Ṣalāḥ al-Dīn Yūsuf b. Ayyūb, r. 564–589/1169–1193) の命を受けてイエメンへ侵攻したトゥーラーン・シャー (Tūrānshāh b. Ayyūb, r. 569–571/1174–1176) は、ザイド派政権 (284–1382/897–1962) を除く割拠していた諸王朝を滅ぼし、イエメン・アイユーブ朝 (569–626/1174–1229) を成立せしめた。

この時、トゥーラーン・シャーの軍の主力を成したのが、クルド系・トルコ系の人々から成る軍団であった [Mahoney 2016; Mahoney 2018]。アイユーブ家がクルド系であったことに加えて、アイユーブ朝下のシリアやエジプトで用いられていた北方出身の軍事奴隷あるいは傭兵が、そのままイエメンへ派遣されてきたのである。彼らはアイユーブ朝に絶えず恭順であったわけではなく、西暦 12 世紀末から 13 世紀初頭にかけてクルドがティハーマを拠点として活動し、アイユーブ朝スルタンを暗殺するという事件も発生した。

続くラスール朝期にも、こうした外来の人間集団の流入が見られた。ラスール朝は、569/1173 年あるいは 579/1183 年にアイユーブ朝のイエメン侵攻とともにやって来たラスール家のヌールッディーン (Nūr al-Dīn, r. 626–647/1229–1250) によって建てられたものであり、ティハーマと南部山岳地域を支配下に入れ、北部山岳地域に興っていたザイド派政権と対峙しながら二世紀を超えてイエメンを治めた [馬場 2017b: 13–21]。ラスール家の系譜を南アラブの祖であるカフターン (Qaḥṭān) へ連ねる史書も存在するが、同時代史料のいくらかも現代

の研究者も、ラスール家がトルコ系である点で意見の一致を見る [馬場 2017b: 285 n.24]。ラスール朝は、アイユーブ朝の支配体制を継承した結果、トルコ系・クルド系の人々を軍事目的で利用するとともに [al-Fiṭī 2005; Mahoney 2016]、エチオピア系の人々を家内集団として活用し続けた [馬場 2017b]。

一方でラスール朝史料は、おそらくは自由人として東アフリカからやって来る人々の記録を断片的ではあるがとどめている [Baba 2018; 馬場 2017a]。たとえば 729/1329 年にメッカで亡くなったアブー・アル＝ハサン・アッ＝ザイライイー (Abū al-Ḥasan ‘Alī b. Abī Bakr b. Muḥammad al-Zayla‘ī al-‘Uqaylī) は、そのニスバが示すように東アフリカの港町ザイラウ (Zayla‘) に縁を持つ人物であった。年代記によれば [al-‘Uqūd II: 53–54]、この一族はエチオピアのビット (Biṭṭa) と呼ばれる村の出身で、アブー・アル＝ハサンの祖父がイエメンのサラマ (Salāma) にたどり着き、そこでその長であった人物の娘と結婚した。彼らはこうしてザイラウに由来するという背景を名前のなかに保ちつつ、イエメン社会のなかでイスラームの知識人の家系として繁栄していったのである。

以上見てきたように、中世イエメンにおいては様々な出自を持った人々が流入し続けていた。彼らは、自由人であることも奴隷であることもあれば、北方のトルコ系・クルド系、アフリカのヌビア系・エチオピア系であることもあった。アイユーブ朝の侵攻以降、北方由来の人々の流入が加速したが、一方で前代と同様に東アフリカ出身者の移動も行われていた。

III. ラスール朝に仕えた人々

ラスール朝は、200 年を超えてイエメンを統治することとなった。イエメン社会は、おそらくは見た目の上では土着の「イエメン人」が多数派であっただろうが、前節で見たように、北方あるいは東アフリカから流入する人々とその子孫をも構成員として内包していた。以下では、ラスール家の宮廷で仕えた人々について、別稿 [馬場 2017b: 167–188] で検討した内容をもとに概観を示したい。

アブドとジャーリヤ、ハーディムについては、『知識の光』所収のアデン港課税品目録ならびにエチオピアに関する記事のなかに記載が見られる。このうち、アデン港課税品目録のある記事には以下のようにある。

エチオピア奴隷 (raqīq al-Ḥabasha)：ハーディム —4、男であるアブドやジャーリヤ —2、エチオピアからの男であるアブド —1。ザンジュ奴隷：アブドやジャーリヤ —2+1/4、ザンジュ・イルジュ —1+1/4。[Nūr I: 429]

このように明確に、彼らは奴隷と総称される商品として記録されている。数字は、アデン港において課された一人頭の関税額 (単位はディーナール (dīnār)) を示す。アブドやジャーリヤは他地域と同様にそれぞれ男性奴隷と女性奴隷を示していたものと見られ、特にジャーリヤについては、西暦 13 世紀前半にアデン港を訪れたペルシア系の旅行家イブン・アル＝ムジャー

ウィル (Ibn al-Mujāwir, 7/13 世紀没) が以下の記事を残している。

ジャーリヤは、焚香料で焚かれ、香り付けされ、きちんとされている。彼女の腰あたりには、前掛けが巻かれている。売り手が彼女の手を取って市場のなかをぐるりと回り、彼女について叫ぶ。すると、邪な商人たちがやって来て、彼女の手や足首から先、足首からももの付け根、もも、秘部、胸部、乳房を調べる。さらには彼女の背中も調べられ、臀部が計測される。さらに、彼女の舌や歯、髪が調べられる。労力を惜しまないのである。もし彼女が衣服を着ていたら、それを脱がせて、調べ、見る。最後に、覆いやヒジャーブを着せることなく、彼女の膺や肛門を観察して調べる。[al-Mujāwir I: 145]

イブン・アル＝ムジャーウィルが「邪な商人」と断じているように、商人たちによるジャーリヤの品定めは徹底しており、ジャーリヤを性的に活用する意図がその背景にはあったものと考えられる。またハーディムについては、「男であるアブド」と敢えてアブドの男性性が強調されていること、関税額がアブドやジャーリヤより高額であることを踏まえれば、去勢されたアブド、すなわち去勢者であった。

管見の限りでは、アブドとハーディムが東アフリカ以外から流入した形跡はほとんど見られない。以上の検討と併せて考えれば、アブドとハーディムはエチオピアやザンジュからもたらされる黒人奴隷によって主に成り立っていたと推測される。彼らはエチオピアの高原地帯から海岸部のザイラウへ運ばれ、そこからアデンへ海を渡ったか、あるいは、東アフリカのザンジュからもたらされたかのいずれかであった。

マムルークについてはアデン港課税品目録に記載がない一方で、たとえば以下のように、ジャーリヤとともに年代記にエジプトからの贈物として記録されている。

ザビードへの贈物の到着は、前述の 800 年サファル月 24 日 [1397 年 11 月 2 日] の木曜日のことであった。壮麗なる贈り物のうちには、30 人ほどのトルコのマムルークや、鞍を付けられた 12 頭のよい馬、綺麗な道具、ルームやアルメニアのジャーリヤ、エジプトのユダヤ人である医師マーハル (Māhar) があった。[al-‘Uqūd II: 242; al-‘Asjad: 493–494]

既述したように、ラスール朝期にはトルコ系・クルド系の人々が軍事集団としてイエメンへやって来ていた。ラスール朝史料は、アイユーブ家とラスール家を含めたこれらをグズ (ghuzz) と呼んでいるが、非アラブ系の軍人を総称する曖昧な語であり、グズと描かれる限りにおいてはその具体的な出自はよくわからない。そうしたなかでも特にクルドは、ラスール朝と対峙するザイド派政権と同盟や婚姻関係を結ぶなどして、山岳地域のザマール (Dhamār) 近辺を拠点としてある程度の独立性を有し、ラスール朝とたびたび軍事的に衝突したことで知られる [Mahoney 2016]。791/1388 年の記事を最後にクルドは史料上から姿を消すが、このことは彼らが現地の人々と婚姻を重ねた結果、イエメン社会と同化していったことを示唆する。

他方、グラームについては、アッバース朝やサファヴィー朝下のように奴隷あるいは解放奴隷として軍事集団を形成した形跡は、ラスール朝下では見られない。アデン港課税品目録のなかでは、12世紀の状況を伝えるイブン・アル＝ムジャーウィルの記事にのみインドから運ばれるグラームが言及される [al-Mujāwir: 143]。むしろグラームと呼ばれた人物が長い系譜を持っていたり [al-'Uqūd II: 121]、ラスール朝と敵対した勢力が自身の息子をグラームとしてラスール朝スルタンに差し出したりするなど [Ta'rikh: 101]、グラームが自由人あるいは自由人によって担われる職掌を指している例が散見する。そのため現段階では、ラスール朝下におけるグラームは主として自由人の青少年の男性を指したと考えたい。

ラスール朝宮廷において、彼らは給与を得ながら様々な仕事に従事していた [馬場 2017b: 172–182]。アブドやハーディム、グラームは、スルタンの厨房などにおいて、単純労働を行っていた。もっとも、ハーディムやグラームのなかには役職に就く者もあったが、アブドについてはそうした記述は見られない。ハーディムは特に、去勢者であるという性質上、ラスール家の女性成員のもとにいた例が散見する。このように、東アフリカやイエメン出身と思われるアブドやハーディム、グラームは家内労働に、北方出身と思われるマムルークは軍事活動に、それぞれもっぱら従事しており、出身地あるいは見た目にもとづいた仕事の区分が「結果として」存在することとなっていた。

なお去勢者であるハーディムのうち、ラスール朝支配体制の高位に至った者はタワーシーと呼ばれ、殊更に重要な職務に就いていた [馬場 2017b: 173–176]。タワーシーは、アミールとして軍を指揮したり、スルタンの代理 (nā'ib) を務めたり、ラスール家の成員の家内を監督したりと、政治的軍事的に重要な仕事をこなした。その引き換えに、タワーシーはスルタンからイクター地を分与されたほか、国庫からの給与や私領地からのあがりを手に入れるなど、金銭的に大きな恩恵を受けていた。タワーシーの活動については、別稿にて詳述する予定である。

IV. 人間集団アブドとその展開

前節で検討した人々のうち、アブドと呼ばれる人々がラスール朝の体制の外で人間集団を形成していた記述が史料中に散見する。たとえばラスール朝末期には、「ラスール家のアブド」や諸部族が有したと見られる様々なアブドが、特定の人間集団として活動をはじめるのである [ex. Ghāyat: 584–586, 591, 605, 618]。ラスール朝史料では、ティハーマのザビード周辺にはティハーマのアブドが、そして南部山岳地帯のウサーブ (Wuṣāb) には仔細不明のアッ＝シャムスィーのアブド ('abīd al-Shamsī) がそれぞれ居住していたことが記録されている [Wuṣāb: 73, 74, 76, 87; Bughyat: 119]。多くの場合、彼らの詳細や出自については十分な記述が存在しないが、ティハーマのアブドのみ、史料にいくらかのまとまった記録が残されている。

ティハーマには、「ファーティクのアブド ('abīd Fātik)」と「サイドのアブド ('abīd Sa'id)」が居住していた。スルタン・アシュラフはその著書において、彼らの出自について以下のように説明している。

ファーティクのアブドは、ザビードの王であったエチオピアのファーティクに由来する、エチオピアのアブドのことである。その兄弟であるスルール (Surūr al-Qā'id) は、マフジャム (al-Mahjam) の王であった。彼ら (ナジャーフ家) はその地方を支配していた。(マフディー朝の) アブド・アン＝ナビー ('Abd al-Nabī, r. 559–564/1163–1174) のもとにグズがやって来ると、グズは彼をザビードにおいて絞首刑に処した。[Turfat: 53]

彼ら (マフディー家) の軍隊のうちには、ワーディー・ザビード (Wādī Zabīd) やリマウ (Rima') にいるサイードのアブドがいた。サイードとは、アリー・ブン・マフディーのことであり、その息子たちは除かれる。彼以外に、サイードと呼ばれる者はいない。[Turfat: 53]

以上の記述から、ファーティクのアブドはナジャーフ朝最後の君主であるファーティク (Fātik b. Muḥammad b. Jayyāsh b. Najāh, r. 531–554/1137–1159) に由来するアブドであり、サイードのアブドはザビードをナジャーフ朝から奪取したサイード、すなわちマフディー朝のアリー・ブン・マフディー ('Alī b. Mahdī, r. 531–554/1137–1159) に由来するアブドであったことがわかる。彼らは、アイユーブ朝の侵攻以前にエチオピアなどからイエメンへ流入した人々であって、主であるファーティクやサイードが亡くなった後も、「ファーティクのアブド」や「サイードのアブド」として、外部から認識され続けた。

ラスール朝のお膝元であるザビードの近辺に集住していたものの、彼らがラスール朝にアブドとして仕えた形跡は見られない。一方で彼らは時に武装し、軍事行動を引き起こすことがあった。たとえば西暦 14 世紀前半、ラスール朝内部でスルタン位をめぐる熾烈な戦いが生じた際の記事に以下のようにある。

(723/1332–1333) アッ＝ザーヒルがザビードを手に入れたが、彼のもとにはその名を呼んだフトバ以外残されていなかった。彼らがザビードに落ち着いた頃、アミール・アフマド・ブン・イズダマル (Aḥmad b. Izdamār) がサラマ村からアル＝ムジャーヒドのもとへ移って来た。アミール・アフマドはアル＝ムジャーヒドに、アブドたちの手からザビードを奪うことができると保証した。アル＝ムジャーヒドは、アミール・アフマドに 500 の騎兵と 600 の歩兵を準備した。アミール・アフマドは、クルトゥブ (al-Qurtub) とザビードの間に数日間滞在した後、ワーディー・ザビードにある自身の私領地へ一団とともに出ていった。好機を見出したザビードにいるアブドたちは、彼の駐屯地へ進軍した。アミール・アフマドは返り討ちにし、とどまっている者を殺害した。するとアブドたちは、アミール・アフマド・ブン・イズダマルに寝返った。しかしアミール・アフマドらはアブドたちを捕え、その一部を殺害した。ザビードにいる者についてはアイバク・アッ＝ダウィーダール (Aybak al-Dawīdār) を除いて殺害しなかった。[Ghāyat: 498–499]

スルタン・アル＝ムアイヤド (al-Malik al-Mu'ayyad Hizabr al-Dīn Dāwūd, r. 696–721/1296–1321)

の後を継いだアル＝ムジャーヒド (al-Malik al-Mujāhid Sayf al-Dīn ‘Alī, r. 721–722, 722–764/1321–1322, 1322–1363) は、即位後、叔父にあたるアル＝マンスール (al-Malik al-Manṣūr Ayyūb, r. 722/1322) とその息子であるアッ＝ザーヒル (al-Malik al-Zāhir Asad al-Dīn ‘Abd Allāh, r. 722–734/1322–1334) とスルタン位を巡って激しく対立した。特にザーヒルは 12 年間にわたってティハーマを支配したため、この時期のラスール朝下イエメンは二つに分割されることとなった。本記事では、ティハーマにおけるアル＝ムジャーヒドとアッ＝ザーヒルの争いのなかで、アブドがアッ＝ザーヒル側に付いてザビードを占拠していたこと、武装してアミール・アフマドを倒そうとしたこと、敵わないと見るや寝返ったこと、が記録されている。ここからは、ティハーマのアブドが政権にとって味方にも敵にも容易に転がり得る不確定要素であったことをみてとることができる。

彼らは平時は、ワーディー・ザビードで暮らす農民であったと考えられる。このことを示すものとして、13–14 世紀のラスール朝下の各地における徴税の記録である『ムアイヤド帳簿』所収の以下の記事が挙げられる。

戦士 (al-ḥarrāba) ファーティクのアブドには、農耕地などにおいて (徴税人に対する) 目隠しをつくることを禁ずるが、これは彼らの長には受け入れられていない。また彼らには、ワーディーのなかに建築物をつくることもできないとされている。計算では、5,000 ディーナールほどが (ワーディー・ザビードのファーティクのアブドの農耕地から) 政庁のために得られることとなる。[Irtifā‘: 14–15]

ファーティクのアブドが戦士と呼ばれていることは、ラスール朝側がその本質を彼らの軍事力に見出していたようで興味深い。徴税人による税収高の査定が正確に行われるよう目隠しの使用をラスール朝側は禁じたが、ファーティクのアブドの独立性を示すかのように、それは「彼らの長」には受け入れられなかったという。ともあれ、年間 5,000 ディーナールの税収高が見込まれる土地で農耕していたことが、この記事からはわかる。

それでは、こうしたティハーマのアブドの規模はどのようであったのか。『ムアイヤド帳簿』に目を通すと、アブドが集住していたワーディー・ザビードにおける穀物の税収高の総額とその内訳が容量単位である mudd と thumn で記載されている [Irtifā‘: 38]。ここで着目すべきは、ラスール朝の国庫に入っていない非国庫収入の内訳に、ファーティクのアブドとサイドのアブドへの支給品が記されている点である。『ムアイヤド帳簿』では、税収高の総額が国庫収入 (mustakhraj) と非国庫収入 (musāmaḥa) から成り立っているように記録される [Irtifā‘: 3 n.8, 4 n.5]。¹すなわちラスール朝下では、その一帯における税収高を査定する際に、国庫へ直接入っていくあがり、スルタンの私領地やワクフ地などからの免税対象となっているあがりを区別したうえで、それぞれの税収高を算出し、税収高の総額として合計したものと見られる。ワーディー・ザビードの税収高は現金と現物から成っており、ナツメヤシや綿、ココヤシ、豆類、穀物が課税対象となっていた。このうち穀物については、ラスール家王族や高官、カーディー (qāḍī, 裁判官)、ファキーフ (faqīh, 法官) の私領地や遺産、ワクフ地における税

収高が免税対象となっていた。

同記事には、ワーディー・ザビードの支配者は、慣習として、ファーティクのアブドに対して 94 mudd と 16 thumn + 1/2 + 1/8 を、サイードのアブドに対して 78 mudd を、それぞれ支給していたとある。またラスール朝史料には、一人の人間による穀物の月間消費量や度量衡の換算に関する記事が散見する。² これらを手がかりに、彼らの人数を試算すると、以下のようになる。

1) 一人の人間が一ヵ月間に食べる量

$$1 \text{ zabadī Ta'izzī} = 8 \text{ raṭl} \quad [\text{al-Sulūk II: 105; al-'Uqūd I: 136}]$$

2) 度量衡の換算

$$1 \text{ mudd} = 32 \text{ thumn} = 80 \text{ zabadī Ta'izzī} \quad [\text{al-Mujāwir: 89; Nūr I: 343}]$$

3) ティハーマのアブドの人数

1) と 2) より

ファーティクのアブド：

①支給される穀物の量を zabadī Ta'izzī に換算

$$94 \text{ mudd} + 16 \text{ thumn} + 1/2 + 1/8 = 94.52 \text{ mudd} = 7,561.6 \text{ zabadī Ta'izzī} / \text{年間}$$

②①の結果を 12 ヶ月で割る

$$7,561.6 \text{ zabadī Ta'izzī} \div 12 \text{ ヶ月} = \underline{\text{約 630 人}}$$

サイードのアブド：

①支給される穀物の量を zabadī Ta'izzī に換算

$$78 \text{ mudd} = 6,240 \text{ zabadī Ta'izzī} / \text{年間}$$

②①の結果を 12 ヶ月で割る

$$6,240 \text{ zabadī Ta'izzī} \div 12 \text{ ヶ月} = \underline{\text{約 520 人}}$$

以上より、『ムアイヤド帳簿』の時代、おそらくは西暦 13 世紀末のファーティクのアブドは約 630 人、サイードのアブドは約 520 人であったと推測される。実際には、食べる量が大きく異なる老若男女が集団のなかに混ざっているため一概には言えないところはあるものの、西暦 15 世紀中頃にティハーマのアブドに召集をかけた際には 500 人程度の男性が集まったという記述 [al-Mukashshih: 242] を踏まえれば、上記の試算も大きく誤るものではないだろう。

以上を総合すると、ティハーマのアブドは、ラスール朝にとって無視できない人間集団としてザビード周辺に居住し続けた。彼らは、農耕地で耕作して税を納める一方で、穀物を支給されてもいた。その背景には、ティハーマのアブドが時に軍勢力を駆使する武装集団としてラスール朝に協力したり反抗したりする存在であったことが挙げられる。おそらくはティハーマのアブドは、その拠り所を外来のラスール朝に対して持つことはなかったため、このような両面の行動をとることができた。ラスール朝は、彼らを完全に野放しにすることも厳しい弾圧を加えることもなく、ほかの農耕地と同様に徴税するとともに穀物を支給するという鞭と飴を使い分けることで、彼らを懐柔していたと考えられる。

ラスール朝末期やターヒル朝（858–923/1454–1517）初期になると、ティハーマのアブドの活動が活発化する。たとえばスルタン・アル＝ムザッファル II 世（al-Malik al-Muẓaffar Yūsuf, r. 845–?/1442–?）の頃には、アブドがザビード南方のハイス（Ḥays）へ侵入し、アル＝ムジャーヒドの傍系にあたるアン＝ナースイル（al-Malik al-Nāṣir Aḥmad, r. 846–847/1442–1443）を見つけ出すと、彼をスルタンに担ぎ出した [Bughyat: 112–113]。その結果、アラブ遊牧民による頻発する反乱も相まって、ラスール朝末期のイエメンはますます混乱の様相を呈することとなった。ラスール朝が崩壊しターヒル朝が実権を握った際には、「ザビードにおいてはアブドによる腐敗が多く生じていた」[al-Mukashkash: 240]。そのためターヒル朝は、最初期の基礎固めの一環として、ティハーマのアラブの反乱の制圧に加えて、ティハーマのアブドとの調整を急ぐこととなった [Bughyat: 118–120; al-Mukashkash: 240–241; Qurat: 494–501, 513–514]。

イエメン南部がオスマン帝国の支配下に入ってから以降、ティハーマのアブドがどのように展開したのかという点については未だ十分に検討されていないが、現代のイエメンの最下層を構成するアフダーム（akhdām）になっていったという説も存在する [Irtifā': lām, 14–15 n.10, 24 n.6]。アフダームには学問や職業選択の自由が制限されており、ゴミ回収業者などの限られた職に就き、衛生状況がよくない住居に住まうなど、相対的に困窮した状態に置かれ続けている。一般的なイエメン人と比べると肌の色が黒く、またアフリカ系の顔立ちをしているアフダームの出自については、前イスラーム期のヒムヤルの時代にエチオピアから流入した人々に起源を求める説から、ザイド派到来以降の諸王朝による支配下で流入したアフリカ出身者によって形成されていったとする説まであり、決定的なものは出されていない [al-Khayyāt 2007; Nevola 2020; Vombruck 1996]。2009 年から 2011 年にかけてイエメンに滞在した際の個人的な経験をもとにすれば、アフダームであることを示す公的な身分証というものは存在せず、あくまでも社会における認識と自己認識の両方が、彼らをアフダームたらしめているようである。アフダームの外見にはオーストラロイド的な要素も混ざっているように見受けられ、8 世紀以降に生じたインド洋における北赤道海流を用いたインドネシア系の人々による東アフリカやマダガスカルへの移住の影響 [Alpers 2014: 9] も考慮しなければならないだろう。さらには、現地の人より「アフダームに落ちるアラブ人もいる」との話を伺ったこともあるうえに、そもそもアフダームではないイエメン人のなかにもアフダームと外見上の違いが見られない人が含まれている。現段階では、ティハーマのアブドとの連続性については推測の域を出るものではなく、アフダームのなかには多様な出自を持った人々が内包されており、そのなかには中世イエメンにおいてアブドとして記録された人々の子孫が混ざっている可能性を指摘するにとどめる。

ティハーマのアブドや現代のアフダームが自分たちの出自を数百年前の主人やアクスムのイエメン来襲時にわたって来た人々に求めたこと——あるいは周囲がそのように認識したこと——の背景には、カフターンやアドナーン（ʿAdnān）へ遡る系譜を持つことを誇りとする「イエメン人」との接触のなかで醸成されたある種の対抗意識や区別意識があったことだろう。実際にはそのイエメン人が有する系譜はきわめて流動的なものであり、自分たちを任意の名祖のもとに位置付けなおすなどの系譜操作を行っていたが [Varisco 2017]、明確な血統を持ってい

ること自体が当然の社会においては、出自を抹消された奴隷やその子孫は混血を通して社会に同化していくか、あるいは出自を主張することで自分たちらしさを保ちながら生存していくはかなかった。同化しなかった——できなかった——ティハーマのアブドは自分たちの由来を奴隷であったことに求め、現代のアフダームはアクスムに求めたのである。

V. おわりに

以上本章では、中世イエメンにおける奴隷を人々の移動と展開という観点からとらえ直した。中世イエメンの奴隷に関連する単語や傾向の特殊性は、他地域では奴隷身分を意味するとされているグラームが自由人をもっぱら指したことや、アフリカ出身者、特にエチオピア系の奴隷が積極的に活用されていたことに求められる。こうした傾向は、エチオピアと物理的に近いという地勢上の特徴に加えて、古代南アラビア諸王国時代から観察されるアフリカ大陸を出走した人々がイエメンへ向かうという移動の方向性が後景に存在した。労働力をイエメン側が必要とし続けた一方、アデン湾を超えてイエメンへわたるという移動がエチオピア側にとって常態化していた、あるいは、一種の成功ルートとして認識されていた可能性も否定されまい。アイユブ朝期以降、トルコ系・クルド系の人々が増加するが、東アフリカの形跡が現代のイエメン人の見た目に残っていることと比べれば、トルコ系・クルド系の人々の痕跡はイエメン社会のなかに消えていったように見える。

このうち、ラスール朝期に既に百年を超える歴史を有したティハーマのアブドと、その延長線上にあるかもしれない現代のアフダームは、人類史における人間集団の形成を考える上で、興味深い事例である。イスラーム世界では、奴隷とは主人との関係性のなかにおいてのみ認められるもので、奴隷がひとつの社会的階層をつくることはなく、むしろ、主人から解放されることで社会のなかへ同化していったとされる。それでは、イエメン社会へ完全に溶け込まず、世代を超えて人間集団として展開したティハーマのアブドや現代のアフダームを、どのように考えればよいだろうか。どのような力が作用した結果、彼らは自由あるいは不自由な移動を経てイエメン社会を構成することになったのか。奴隷であることあるいは奴隷であったことが社会のなかで卑下されるきっかけとなり得るにも関わらず、彼らはなぜ、社会への完全なる同化よりもアイデンティティを保つことを選ぶことになったのか。

以上の疑問は、現代に見られる事象へもつながるものである。奴隷廃止という思想が世界を覆うなかで、イエメンにおいては、イエメン・アラブ共和国（1962–1990）が発足した1962年になってようやく奴隷が公的に廃された [Mier 2003: 352]。奴隷廃止の受容が他地域と比べて遅れた背景には、ザイド派最後の王朝となったイエメン・ムタワッキリテ王国（1918–1967）からのイエメン・アラブ共和国の独立、あるいはイギリスによる南イエメンの支配とイエメン人民民主共和国（1967–1990）の成立といった政治的な変動のなかで、奴隷制にまで配慮をはらう余裕がなかったというのも考えられることだが、果たしてそれだけで説明されるものであろうか。現代においても、依然として奴隷制が存在しているという主張が見られ [al-Wase'ee & Sariah 2017]、また奴隷とは呼ばれていないものの被差別層であるアフダームが社会の底辺

を構成し、ソマリアからの移民がイエメンへ流入している。さらには逆の流れとして、ラスール朝期に既にイエメンから東アフリカへの移動が観察されるが [Baba 2018; 馬場 2017a]、近年ではイエメン内戦の影響によってイエメンを出立してジブチへ向かう人々も増えている [野中 2016]。このような 20 世紀以降のイエメンに見られる人々の動きや人間集団の認識の在り方を理解するためには、近現代の政治の流ればかりではなく、中世イエメンにおける人々の移動と展開がこれらの現象のなかで底流し、社会の在り方を規定している可能性を含めて検討する必要があるのではないか。もちろん、中世と現代のあいだには時間的な隔たりがある以上、両者を無批判につなげて考えることはできない。オスマン帝国下やザイド派政権下、イギリス支配時代におけるイエメンの状況について、インド洋西海域において連綿と続く人々の移動という一連の現象とあわせて総合的に考察することを今後の課題として、本章を締めたい。

註

¹ mustakhraj について、Varisco は査定額 (tax assessment) の訳をあてている [Varisco 1991: 4]。また musāmaḥa については、字義通りには「免税」となる。

² 地域ごとに様々な容量単位や重量単位が用いられており、それらを正確に我々が用いている単位に換算することは難しいが、1 zabadī Ta'izzī が 750–1562.5 グラム (g) に相当したとすれば [馬場 2017b: 282 n.57]、mudd と thumn の重量はそれぞれ以下のように計算される。

mudd: 1 mudd = 80 zabadī Ta'izzī = $80 \times 750\text{--}1562.5\text{g} = 60,000\text{--}125,000\text{g} = 60\text{--}125\text{kg}$ 。

thumn: 32 thumn = 80 zabadī = 60,000–125,000g。したがって、1 thumn = $60,000\text{--}125,000\text{g} \div 32 = 1,875\text{--}3,906.2\text{g} = 1.9\text{--}3.9\text{kg}$ 。

参考文献

〈外国語文献〉

- Alpers, E. A. 2014. *The Indian Ocean in World History*, Oxford: Oxford University Press.
- al-'Amrī, Ḥ. 'A. 1987. 'Slaves and Mamlukes in the History of Yemen'. In *Yemen: 3000 Years of Art and Civilization in Arabia Felix*. ed. W. Daum, 140–157. Innsbruck: Pinguin-Verlag; Frankfurt/Main: Umschau-Verlag.
- anon. 2008. *Irtifā' al-Dawla al-Mu'ayyadīya: Jibāyat Bilād al-Yaman fī 'Ahd al-Sulṭān al-Malik al-Mu'ayyad Dāwūd b. Yūsuf al-Rasūlī al-mutawaffī sanat 721 h./1321 m.* ed. M. 'A. Jāzim. Ṣan'ā': Centre français d'archéologie et de sciences sociales.
- anon. 2003–2005. *Nūr al-Ma'ārif fī Nuẓum wa-Qawānīn wa-A'rāf al-Yaman fī al-'Ahd al-Muẓaffarī al-Wārif*. 2 vols. ed. M. 'A. al-Jāzim. Ṣan'ā': Centre français d'archéologie et de sciences sociales.
- anon. 1976. *Ta'rīkh al-Yaman fī al-Dawla al-Rasūlīya*. ed. H. Yajima. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- al-Ashraf. 1991. *Ṭurfat al-Aṣḥāb fī Ma'rīfat al-Ansāb*. ed. K. W. Zettersteen. Bayrūt: Dār al-Ṣādir.
- Ayalon, D. 1999. *Eunuchs, Caliphs and Sultans: A Study of Power Relationships*. Jerusalem: Magnes Press, 1999.
- Baba, T. 2018. 'Notes on Migration between Yemen and Northeast Africa during the 13–15th Centuries'. *Chroniques du manuscrit au Yémen Numéro spécial 1*: 69–86.

- Chamberlain, M. 1998. 'The Crusader Era and the Ayyūbid Dynasty'. *The Cambridge History of Egypt* 1: 211–241.
- Cortese, D. and S. Calderini. 2006. *Women and the Fatimids in the World of Islam*. Karachi: Edinburgh University Press.
- al-Fifī, M. Y. 2005. *al-Dawla al-Rasūlīya fī al-Yaman: Dirāsa fī Awḍā'i-hā al-Siyāsīya wa-al-Ḥiḍārīya 803–827 h. /1400–1424 m.* Bayrūt: al-Dār al-'Arabīya li-al-Mawsū'āt.
- Humphreys, R. S. 1997. *From Saladin to the Mongols: The Ayyubids of Damascus, 1193–1260*. New York: State University of New York.
- Ibn al-Dayba'. 2006. *Bughyat al-Mustafīd fī Ta'rīkh Madīnat Zabīd*. ed. 'A. M. al-Ḥibshī. Ṣan'ā': Maktabat al-Irshād.
- . 2006. *Kitāb Qurrat al-'Uyūn fī Akhbār al-Yaman al-Maymūn*. ed. M. 'A. al-Akwa'. Ṣan'ā': Maktabat al-Irshād.
- Ibn al-Mujāwir. 1951. *Ṣifat Bilād al-Yaman wa-Makka wa-Ba'ḍ al-Ḥijāz al-musammāt Ta'rīkh al-Mustabshir*. ed. O. Löfgren. Leiden: E. J. Brill.
- al-Janādī. 1993–1995. *al-Sulūk fī Ṭabaqāt al-'Ulamā' wa-al-Mulūk*. 2 vols. ed. M. 'A. al-Akwa'. Ṣan'ā': Maktabat al-Irshād.
- Kay, H. C. 1892 (1968). *Yaman: Its Early Medieval History*. London: Edward Arnold.
- al-Khayyāt, M. A. 2007. *al-Iqlīyāt fī al-Jumhūrīya al-Yamanīya: al-Akhdām*. Ṣan'ā': al-Ra'ad li-al-Kutub wa-al-Maṭbū'āt.
- al-Khazrajī. 1981. *al-'Asjad al-Masbūk fī man waliya al-Yaman min al-Mulūk*. Ṣan'ā': Wizārat al-A'lām wa-al-Thaqāfa.
- . 1911–1914 (1983). *al-'Uqūd al-Lu'lu'īya fī Ta'rīkh al-Dawla al-Rasūlīya*. 2 vols. ed. M. B. 'Asal. Bayrūt: Dār al-Ādāb.
- Mahoney, D. 2016. 'The Political Agency of Kurds as an Ethnic Group in Late Medieval South Arabia'. *Medieval Worlds* 3: 146–157.
- . 2018. 'Writing the Ethnic Origins of the Rasulids in Late Medieval South Arabia'. *The Medieval History Journal* 21(2): 380–399.
- Marmon, S. E. 1995. *Eunuchs and Sacred Boundaries in Islamic Society*. New York: Oxford University Press.
- Miers, S. 2003. *Slavery in the Twentieth Century: The Evolution of a Global Problem*. California: AltaMira Press.
- al-Mukashkash. 2006. *Ta'rīkh Madīnat Zabīd (in Ibn Dayba', Bughyat al-Mustafīd fī Ta'rīkh Madīnat Zabīd)*. ed. 'A. M. al-Ḥibshī. Ṣan'ā': Maktabat al-Irshād.
- Nevola, L. 2020. "'Black People, White Hearts": Irugubm Race, and Colour in Contemporary Yemen'. *Antropologia* 7(1): 93–116.
- 'Umāra al-Yamanī. 1892 (1968). *Kitāb Ta'rīkh al-Yaman (Yaman: Its Early Mediaeval History)*. ed. H. C. Kay. London: E. Arnold.
- Varisco, D. M. 1991. 'A Royal Crop Register from Rasulid Yemen'. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 34: 1–22.
- . 2017. 'Yemen's Tribal Idiom: An Ethno-Historical Survey of Genealogical Models'. *Journal of Semitic Studies* 62(1): 217–241.
- Vombruck, G. 1996. 'Being Worthy of Protection. The Dialectics of Gender Attributes in Yemen'. *Social Anthropology* 4(2): 145–162.
- al-Wase'ee, A. and A. Sarih. 2017. 'Slavery is still Present in Yemen: Segregation between Masters and Slaves'.

Arab Reporters for Investigative Journalism.

(<https://en.arij.net/investigation/slavery-is-still-present-in-yemen-segregation-between-masters-and-slaves/>) (2020 年 8 月 27 日最終閲覧)

al-Wuṣābī. 2006. *Ta'rikh Wuṣāb al-musammā al-I'tibār fī al-Tawārīkh wa-al-Āthār*. ed. 'A. M. al-Ḥibshī. Ṣan'ā': Maktabat al-Irshād.

Yahyā b. al-Ḥusayn. 1968. *Ghāyat al-Amānī fī Akhbār al-Qaṭr al-Yamānī*. 2 vols. ed. S. 'A. 'Āshūr. al-Qāhira: Dār al-Kutub al-'Arabī li-al-Ṭibā'a wa-al-Nashr.

〈日本語文献〉

佐藤次高 1986. 『中世イスラム国家とアラブ社会——イクター制の研究』 東京：山川出版社.

———. 1991 (1997). 『マムルーク——異教の世界からきたイスラムの支配者たち』 東京：東京大学出版会.

薮勇造 2018. 『物語 アラビアの歴史——知られざる 3000 年の興亡』 東京：中公新書.

清水和裕 2005. 『軍事奴隷・官僚・民衆——アッバース朝解体期のイラク社会』 東京：山川出版社.

———. 2015. 『イスラム史のなかの奴隷』 東京：山川出版社.

鈴木董 1993. 『オスマン帝国の権力とエリート』 東京：東京大学出版会.

———. 1997. 『オスマン帝国とイスラム世界』 東京：東京大学出版会.

鈴木英明 2019. 「世界史的共通体験としての奴隷廃止とそこにおけるリスク」『多文化社会研究』 5: 367–384.

野中亜紀子 2016. 「戦火を逃れて——イエメン難民キャンプの現場から」『アジア研ワールド・トレンド』 248: 12–15.

波戸愛美 2008. 「14–15 世紀アラブ中東社会における奴隷の用語法」『アジア地域文化研究』 4: 105–124.

馬場多聞 2017a. 「ラスール朝史料における東アフリカ」『史淵』 154: 95–122.

———. 2017b. 『宮廷食材・ネットワーク・王権——イエメン・ラスール朝と 13 世紀の世界』 福岡：九州大学出版会.

本稿は、JSPS 科研費（研究課題番号：15H06464）の助成を受けたものである。